中央アジア及びザカフカス地域の自然景観と石油資源（その1）

齊　藤　　隆*

はじめに

ここに「中央アジア及びザカフカス地域」として一括する地域は，東は中国の西縁，西は黒海の東岸，北はシベリアの中部・西部及びウラル・ヴォルガ地域の南縁，南はパキスタン，アフガニスタン，イラン，トルコとの国境によって画される広大な地理的範囲を指す。この地域は19世紀初頭から終わりにかけて帝政ロシアに併合され，その後ソビエト連邦を構成する共和国としてモスクワの支配下に置かれたが，1991年のソ連邦崩壊に際して独立を手に入れた。従来この地域は，ソ連邦の巨大な版図の中に埋もれて，国際社会に姿を見せることが殆どなかったが，近年，貿易，観光，スポーツ並びに石油資源などの面で，その存在がクローズアップされてきている。

「中央アジア及びザカフカス地域」の自然景観は，高く険しい山岳と乾燥地帯，そしていくつかの大河と湖とによって特徴づけられる。また，石油については，欧米及びアジアの企業が入り乱れ，特にカスピ海とその周辺において熾烈な資源争奪戦を展開している。（本地域の石油資源問題に関しては，（その2）として次号で述べる。）

1. 中央アジアとは何か

中央アジアの定義は簡単ではない。厳密に言えば，「アジア」の定義でさえ必ずしも明確とは言えない。地理学の教科書において一般的になされているように，アジアとヨーロッパとの境界を，北極海に面したヤマル半島の西側の付け根からウラル山脈の山嶺をとおり，ロシア～カザフスタンの国境に沿っていったんカスピ海北岸に出，カフカス（コーカサス）山脈の山嶺をとおって黒海に出，ボスポラス海峡，マルマラ海，ダーダネルス海峡を経て，エーゲ海の中にいたる線とし，その東側を「アジア大陸」であるとすれば，その中心はどこか。まったく不規則な曲線に囲まれ，その閉曲線の外に多数の付随物（島々）をもつ図形の中心なり重心なりを求める現実的

* ジャパン石油開発株式会社勤務，城西大学理学部非常勤講師

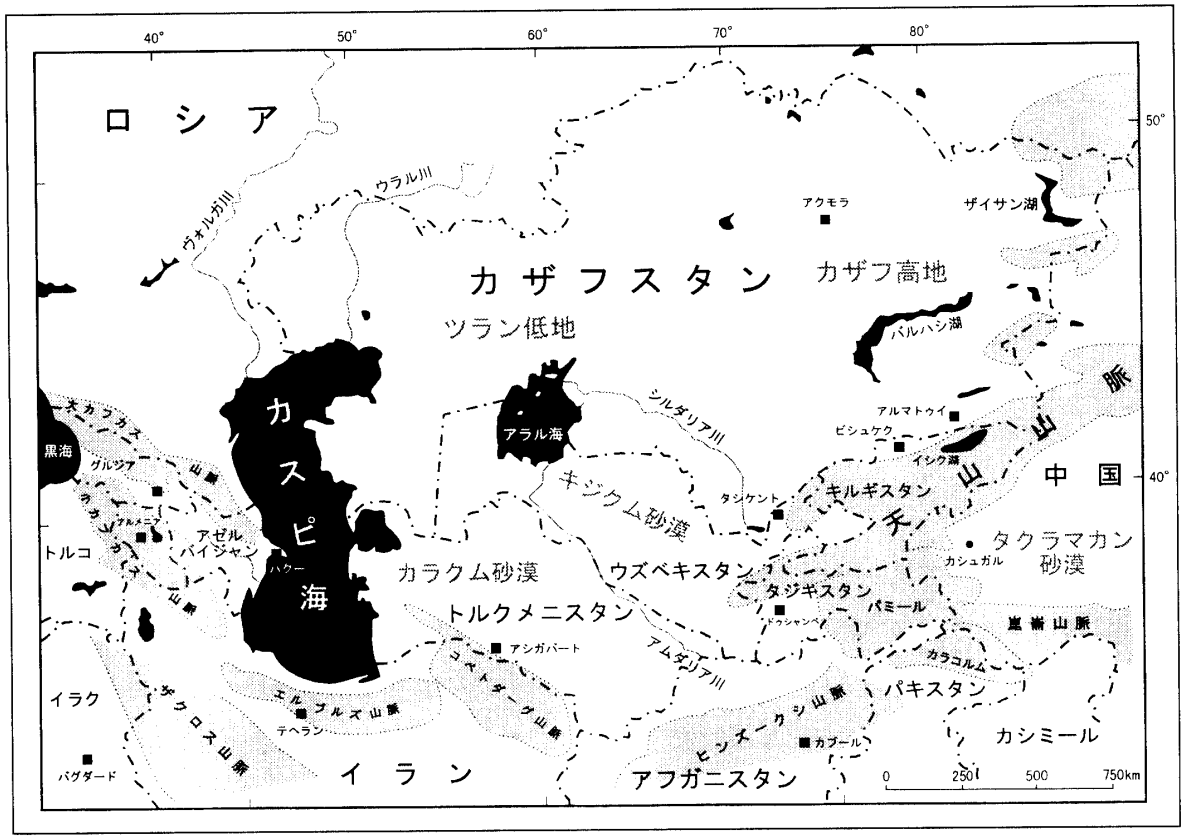

図1　中央アジア及びザカフカス地域略図

な方法などあるのだろうか。メンヒェン・ヘルフェン著「トゥバ紀行」(田中克彦訳，1996）によれば，そのアジアの中心の位置を自らの方法で計算し，自らそこに赴いて「ここがアジアの心臓」と彫った石碑を建てた英国人がいたという。その場所は，現在のロシア連邦トゥヴィンスカヤ共和国（英綴りで Tuvinskaya Oblast, 首都はクズル）の中にあり，モンゴルの北西，エニセイ川の最上流部の山岳地帯，シベリア鉄道の南側，クラスノヤルスクの南方約 400 キロということになるが，いずれにしても世界の殆どの人々にとって馴染みはない。「中央アジア」は，計算上はこのトヴィンスカヤ共和国及びその周辺の地域を指すべきなのだろうが，そこはシベリアの一部であって中央アジアではない。

現在多くの人々に受け容れられている「中央アジア」の定義は，「カザフスタン，キルギスタン，タジキスタン，ウズベキスタン，トルクメニスタンの 5 か国を含む地域」であり，筆者もそれが妥当と考えている。これは中国の新疆ウイグル自治区の西縁からカスピ海の東岸にいたる地域であり，ユーラシア大陸の中央部でこそあれ，決してアジア大陸の中央部ではなく，むしろ西寄りの地域である。それが中央アジアと呼ばれる背景を考えてみる。

本来「中央アジア」は，ソ連邦の経済区（economic region）のひとつで，英綴りロシア語で Srednyaya Aziya と記し，ウズベキスタン，キルギスタン，タジキスタン，トルクメニスタンの 4 か国を包括する地域を意味した。つまり，カザフスタンは中央アジアに含まれていなかった。

このことは，ジョン・コール著「世界の主要地域の地理」(1996)，「万有百科事典世界地理」(1975)，「グランド現代百科事典」(1972) などに明記されている。これにカザフスタンを加える時には Srednyaya Aziya i Kazakhstan，すなわち「中央アジアとカザフスタン」と書かれていた。これに対し，「国際情報大事典」(1993) ならびに最近の年鑑類は，カザフスタンを加えた5か国をもって中央アジアとしている。これは或いは誤用ではないかと考えたが，カザフスタン，ウズベキスタン，キルギスタンの3か国は1993年に「中央アジア経済同盟」を結成し，その後も「中央アジア」を冠したいくつかの協定や条約を結んでいることから，カザフスタンが自らを中央アジアの一員としていることは間違いない。(タジキスタンは内戦により，トルクメニスタンはイランないしトルコとの関係重視により，それら同盟・協定・条約に加わらなかったと考えられる。) 従って，と言うにはいささか論理性に欠けるが，ソ連邦時代の定義が近年歪用され，4か国ではなく5か国を指す方が一般化してきていると見るべきであり，上記5か国をもって「中央アジア」とするのが妥当と考えるのである。

そもそもロシア語の Srednyaya Aziya を Central Asia と英訳したのが，混乱の原因だったようである。Srednyaya を辞書で見ると，①中程の，中部の，中央の，中間の，②中位の，中東の，平凡な，③平均の，とあり，用例として中等学校，中産階級，中等教育，中肉中背，中年，中指などがあげられている。これは，central というよりは middle の意味である。つまり，何かと何かとの中間に位置する「中間アジア」の意味であったものが，英訳の Central Asia という語によりその範囲は感覚的にアジア中央部に向けて拡大したというのが，筆者の推測である。

「世界大百科事典」(1988) によれば，ロシアには Tsentral'anya Aziya (Central Asia の意味) という用語が別にあり，これは中国の東トルキスタン，ジュンガル草原，チベットそれにモンゴルといった「ソ連邦」以外の地域に対して用いられるのだという。これならば確かに「アジアの心臓」に近い。米国で出版された "Academic American Encyclopedia" (1980) におけるように，「ユーラシア大陸の中央部にある広大な乾燥地域で，ソ連邦中央部，モンゴル，イラン，アフガニスタンの一部を含み，面積は750万平方キロ」という大らかな定義もあることを付記する (表1)。

次に，中央アジア各国の現況について述べる。カザフスタンは，中央アジア及びザカフカス地域の中でもっとも工業の発達した国である。牧畜・農業が主要な産業であることに変わりはないが，石炭，石油，鉄鉱，ボーキサイト，ニッケル鉱などの地下資源が豊富であり，それらをもとにした精錬，化学，機械などの工業が定着している。さらに最近では電子，製薬など新しい産業も生まれている。国土の東に偏って位置する首都（アルマトゥイ：写真1）を，その北西500kmのツェリノグラードへ移転することが1996年8月に決定され，現在移転作業が進行中の模様である。新首都の名称はアクモラ (Akmola) となる。ナザルバエフ大統領のもとで国造りを力強く進めており，1997年10月に国営石油会社の社長で49歳のバルギムバエフ氏が首相に登用さ

表1　中央アジア5か国の概況

	カザフスタン	キルギスタン	タジキスタン	ウズベキスタン	トルクメニスタン
面　積 km^2	2,717,000	199,000	143,000	447,000	488,000
人　口(1994)	17,030,000	4,600,000	5,750,000	22,350,000	4,010,000
首　都	アルマトゥイ	ビシュケク	ドゥシャンベ	タシケント	アシガバート
首都人口	1,200,000	640,000	590,000	2,100,000	410,000
独　立	1991.12.16	1991.8.31	1991.9.9	1991.8.31	1991.10.27
言　語	カザフ語，ロシア語	キルギス語，ロシア語	タジク語，ロシア語	ウズベク語，ロシア語	トルクメン語，ロシア語
宗　教	イスラム（スンニ派），ロシア正教	イスラム（スンニ派）	イスラム（スンニ派）	イスラム（スンニ派）	イスラム（スンニ派）
最大人種	カザフ人40%，ロシア人38%	キルギス人52%，ロシア人22%	タジク人62%，ウズベク人24%	ウズベク人71%	トルクメン人72%

（カザフ語，キルギス語，ウズベク語，トルクメン語はチュルク語系，タジク語はペルシャ語系）

写真1　カザフスタンの首都アルマトゥイ市内（1997年7月，矢口良一氏撮影）

れ，このことは同国が石油開発重視の国策を内外に示したものとして注目される。ロシア系の住民が多く，ロシアとの関係も良好である。

キルギスタンは，山国であり伝統的に牧畜が盛んであるが，きめ細かな灌漑により山麓や谷あいの平地には農地（穀物，綿花など）が開かれ，水力発電による電力を用いた軽工業も発展しつつある。また，石炭，石油，天然ガスなどの地下資源開発も進められている。

タジキスタンもキルギスタンと同様山国であり，産業のあり方も類似している。この国の特徴は，中央アジアで唯一ペルシャ（イラン）系のタジク人の住む国だということであり，言語もペルシャ語に近い。古くにペルシャから伝わった絨毯作りの伝統が生きていて，外貨獲得の源となっている。同国では独立以来，旧共産勢力とイスラム勢力とが主導権を争う内戦が続き，前者にはロシアが，後者にはアフガニスタン，イラン，サウジアラビアが介入して泥沼化の状態が続いて

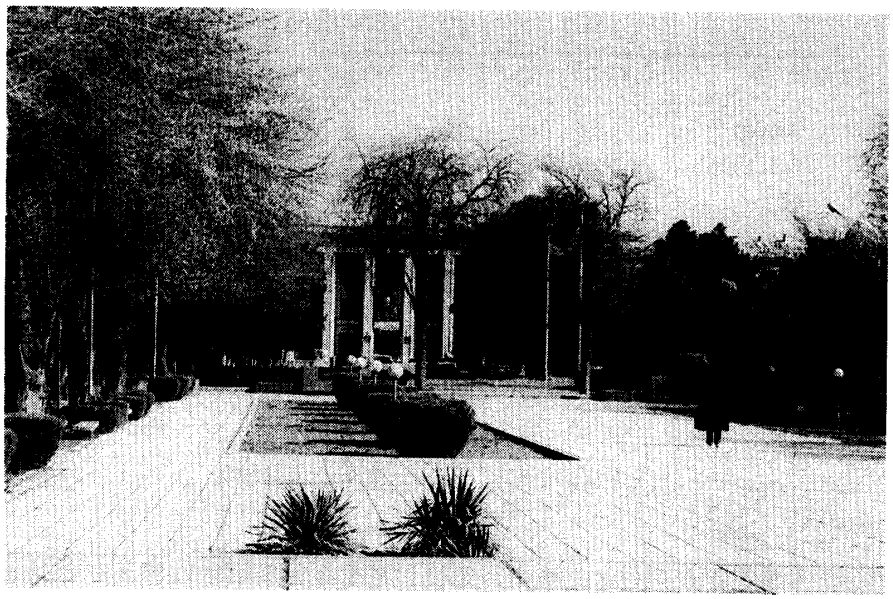

写真2　トルクメニスタンの首都アシガバート市内の公園（1995年3月，筆者撮影）

いる。

ウズベキスタンの心臓部は，シルダリア川上流の沃地フェルガナ盆地である。東西長300 km，幅150 kmのこの盆地は，豊かな水と肥沃さゆえに古来多くの民族の争いの場となった。首都タシケントは，紀元前から栄えた古い都市であり，また古くから中央アジア最大の都市であり続け，帝政ロシアはここにトルキスタン総督府を置いていた。1966年の大地震で町の大半が破壊され，現在の市街はその後に再建されたものである。古代都市でありイスラム教の町としても知られるサマルカンドはタシケントの南西200 km余りのところにある。この国の最大の産業は綿花生産だが，ウラン鉱，金鉱などの地下資源も重要である。

トルクメニスタンの最大の産業は，ウズベキスタンのそれと同様綿花生産である。銅・鉛・亜鉛・金鉱，石膏，硫黄などの採掘，牧畜，軽工業なども重要である。国土の東部には天然ガスの巨大な埋蔵量があり，西部には多数の油田・ガス田がある。ニヤゾフ大統領は，イラン及びトルコへの接近をはかる一方，アゼルバイジャンと同様に石油・天然ガス資源をテコとしてロシア離れの機会をうかがっているが，今のところ地の利の悪さから外国石油企業の吸引にはあまり成功していない。首都アシガバート（写真2）は1948年の大地震で壊滅し（11万2千人が死亡），今でもインフラストラクチャーの乏しさは隠しきれない。

2.　ザカフカス地域

「ザカフカス」（英綴りロシア語でZakavkaz）は，カスピ海と黒海とにはさまれた地域のうち，峻険なカフカス（コーカサス）山脈の南にあるアゼルバイジャン，グルジア，アルメニアの3国

表 2　ザカフカス 3 国の概況

	アゼルバイジャン	グルジア	アルメニア
面　　積 km^2	86,600	69,700	298,000
人　　口(1994)	7,470,000	5,450,000	3,550,000
首　　都	バクー	トビリシ	エレバン
首都人口	1,100,000	1,270,000	1,200,000
独　　立	1991. 8. 30	1991. 4. 9	1991. 9. 23
言　　語	アゼルバイジャン語，ロシア語	グルジア語	アルメニア語
宗　　教	イスラム（シーア派）	東方正教（グルジア正教会）	東方正教（アルメニア教会）
最大人種	アゼル人 78%	グルジア人 69%	アルメニア人 93%

（アゼルバイジャン語はチュルク語系，グルジア語はカフカズ語系，アルメニア語はアルメニア語系）

を指す呼称である（表 2)。カフカス山脈の北側は現在もロシア領で，ザカフカスに対して「プレドカフカス」と呼ばれ，ここにはダゲスタン，チェチェン，イングーシ，北オセチア，カバルジノ・バルカル，カルチャエボ・チェルケシアの 6 共和国があるが，それについてはここでは論じない。ザカフカスというのはカフカスを越えた彼方の土地を意味し，やや蔑んだ意味合いを持つようである。この「ザ」は，ザヴォルガ（ヴォルガの彼方）やザバイカル（バイカルの彼方）におけるザと同じく，向こう側，彼方を示す接頭語である。ザカフカスの南部とその南のトルコとイランに広がる山地は，北のカフカス山脈に対して「小カフカス山脈」と呼ばれることがあり，その場合北のものは「大カフカス山脈」とされる。ザカフカスの 3 国は互いに国境を接するほか，アゼルバイジャンはイランと，グルジアはトルコと，アルメニアはイラン・トルコのいずれとも接している。

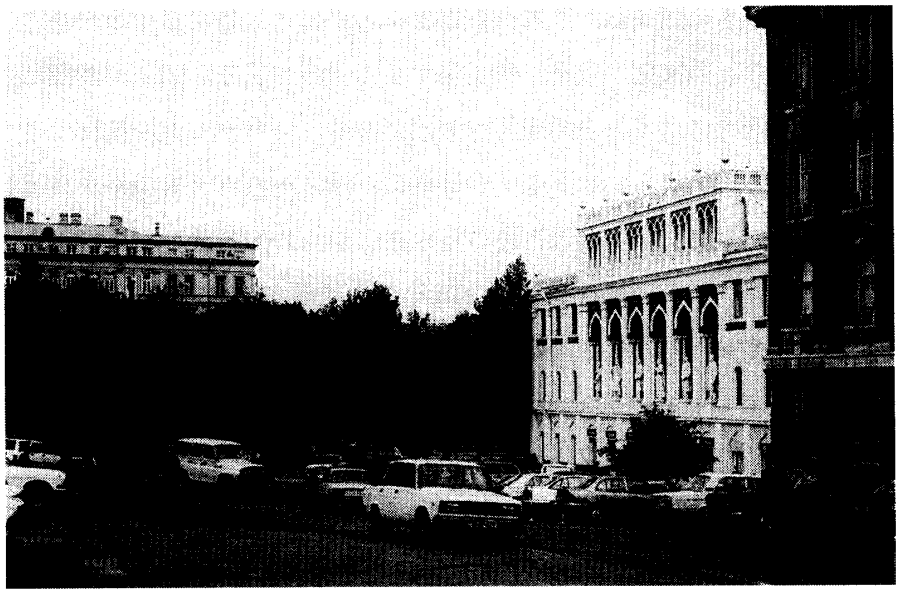

写真 3　アゼルバイジャンの首都バクー市内（1997 年 9 月，筆者撮影）

写真4　バクー市内で，学校帰りの子供たち（1997年9月，筆者撮影）

アゼルバイジャンは，カスピ海に面し，首都バクー沖合いの豊富な石油資源を武器として，米国をはじめとする西側諸国を味方に付け，ロシアへの隷属関係を断ち切ることに成功した。グルジアは，黒海に面し，山地が多く，農業・牧畜業を主産業とする。ロシアの軍事基地を有する一方，シュワルナゼ大統領（元ソ連邦外務大臣）はアリエフ大統領（アゼルバイジャン）との間で通商協定を締結し（1997年），ロシアとの間に距離をおきつつある。グルジアはまた，スターリンの出身地としても知られる。アルメニアは，「小カフカス山脈」の中にある山国であり，農業国である。北部地域が1988年に大地震に襲われ，スピターク，キリバカン，レニナカンなどの町は壊滅的な被害を受けて約2万5千人が死亡した。アルメニアはロシアの軍事基地を有し，ロシアとの間で軍事同盟を結んでいる。

ザカフカス地域では，種々の民族が複雑に分布し，ソ連邦形成の時から存在していた「国境線と民族分布との不一致」にもとづく紛争が，ソ連邦の崩壊後再び表面化した。アゼルバイジャンとアルメニアとの間の「ナゴルノ・カラバフ紛争」（アゼルバイジャン領内にあってアルメニア人（キリスト教徒）が大部分を占めるナゴルノ・カラバフ自治共和国が独立を宣言，ロシアがこれに介入），グルジア国内における「アブハジア紛争」（アブハジア自治共和国（イスラム教徒）が独立を宣言，ロシアがこれに介入）などがその代表例である。

3. カスピ海

カスピ海は，四囲を陸地に囲まれ，外洋（大洋）から孤立した世界最大の湖（面積は37万1000 km^2）である。ウラル川，ヴォルガ川の2大河が流れ込み，ここから流れ出す川はない。

水はやや塩辛く，チョウザメなどの棲む特有の生態系をもち，水面は外洋の海水面に比べて20m余り低い。冬季，淡水の流入する北部で部分的に結氷が見られ，またトルクメニスタン沿岸では強い西風によりまるで真冬の日本海岸のように荒れることがあるという。現在市販されている地図には，水面の海抜高度がマイナス28 mと記されているが，水位はここ数年上昇の傾向にあり，沿岸の施設などに水が迫っているとの情報もある。アゼルバイジャンの首都バクーのあるアプシェロン半島と，トルクメニスタン側の対岸（東岸）とを結ぶ湖の中央部付近で，水深が著しく浅くなっており，あたかも南北2つの湖がここで接合したかのごとくである。湖底の地形は，全体として東側が遠浅で西側が深い。また，ウラル川とヴォルガ川の河口のある北部で浅く，南部が相対的に深くなっており，最深点（1024 m）は湖の南西部にある。

カスピ海には，ロシア，カザフスタン，トルクメニスタン，アゼルバイジャン，イランの5か国が面している。それら当事国の間で「カスピ海は湖か海か」の議論が，このところとみに姦しい。それは科学的あるいは法律的な議論ではなく，地下資源及び水中資源をめぐる力ずくの論争である。ソ連邦が崩壊する前は，当事国はソ連邦とイランの2か国のみであり，両国は両国間の取り決め（1940年）により「湖」の水中資源の配分を決めていた。すなわち，その国の海岸から16 km沖合いまではその国の漁業水域とし，以遠は共同利用水域とされていた。地下資源（石油）に関しては，実際に石油の生産がなされていたのは「ソ連邦」のバクー沖合いの一部だけで，またイラン側の水深が深いこともあって，特にイランが領有権を主張することもなかった。

カスピ海に面する5か国のうち，ロシアとイランは従来どおり「湖」説を，アゼルバイジャンとカザフスタンは「海」説をとり，トルクメニスタンは微妙な立場にある。「海」であるとすることは，北海の海底石油資源に関して，周辺国が画然とした地図上の線でこれを分割したと同様に，カスピ海もきちんと線引きして各当事国の領域を決めてしまおうという考え方である。石油のポテンシャルは，アゼルバイジャン，カザフスタン，トルクメニスタンの方がロシア，イランよりも大きそうであり，これではロシアとイランは巨利を逃してしまうことになる。1996年11月の5か国協議で，ロシアは72 kmまでを領海と認めるという案を提示したが，新生3か国の賛成は得られなかった。

海である場合，原則として相対する国の中間線が分割線となるが，この点でアゼルバイジャンとトルクメニスタンとの間に問題が発生している。アゼルバイジャンのバクーからトルクメニスタンのチェレケンにかけての比較的浅い水域には，有望そうな地下構造の存在が多数知られており，それらがどちらの国に属するのかの問題である。そもそもソ連邦の時代から，カスピ海の石油開発基地はバクーにあり，トルクメニスタン側には何もない。アゼルバイジャンは，過去の探査作業の実績をもとに，中間線を越えた向こう側の所有権をも主張して，トルクメニスタンのニヤゾフ大統領の怒りをかっている。トルクメニスタンには，石油・天然ガスを生産しても搬出するルートがないという致命的な弱みがある。これに対しアゼルバイジャンは黒海岸までの搬出パ

イプライン・ルートをすでに確保した。トルクメニスタンは，この黒海へのパイプラインを利用することと引き換えに，アゼルバイジャンに対し中間線で妥協はしたくはない。そのため搬出ルートをイランに求めるという選択肢を残しておかねばならず（事実1997年9月にイラン向けガス・パイプラインが開通），イランと対立することができないという微妙な立場にあるのである。

4. 中央アジアの自然景観

中央アジアの自然景観は，東から南にかけて連なる天山，パミール，コペトダーグの山岳と，その内側に包み込まれるように広がる草原（ステップ）と砂漠，そしてシルダリア，アムダリアなどの大河で特徴づけられる。

中国新疆ウイグル自治区を北のジュンガル盆地と南のタリム盆地とに分ける天山山脈は，西へ伸びてカザフスタンの南東端，キルギスタンのほぼ全域，ウズベキスタンの東へと伸びている。幅は400 km，長さは中国部分が1500 km，カザフスタン～キルギスタン～ウズベキスタンの部分が1000 km，全体で2500 kmに及ぶ。天山山脈の地質は，大部分が古生代のオルドビス紀，シルル紀，デボン紀，石炭紀の石灰岩，火山岩，砂岩などである。天山山脈がどのように形成されたのかについては，議論が続いており定説化された説明はまだないが，大藤茂他（1998）は中国部分の踏査行をもとに，山体の多くをなす古生代の地層はタリム・プレートの北縁に重複・集積した浅海成堆積物であり，これが北のジュンガル・プレートとの間の東西方向剪断帯の横ずれ運動（古生代後期～中生代初期）によって上昇したと述べている。天山山脈の最高峰は，キルギスタンと中国との国境にあるポベーダ（勝利）峰で7439 mである。3500～4000 m以上は万年雪で，各所に氷河も見られる。

天山山脈西部の南側に，天山とは別の，それより更に高いパミール山地（山塊）がそびえる。パミールは，天山のように方向性をもつ山脈系ではなく，四方に尾根が張り出しているため「世界の屋根」と呼ばれる。パミールはタジキスタンの東半部とその東の中国領内及びアフガニスタン北部に広がり，最高峰は中国側（新疆ウイグル自治区のカシュガルの南）にあるコングール山（7719 m），またタジキスタン国内の最高峰はコミュニズム山（7495 m）である。パミールは，ヒマラヤ，カラコルム，ヒンズークシに次ぐ世界有数の高山であり，それらと同様アルプス・ヒマラヤ造山期の隆起運動によって形成されたとされる。フェドチェンコ氷河など多数の氷河がある。

天山山脈の西端の西より砂漠地帯（ウズベキスタンのキジルクム砂漠，トルクメニスタンのカラクム砂漠）となり，トルクメニスタンの南西部には，国境をはさんでイラン側から続くコペトダーグ山脈が東西方向に連なる。この山脈は主として白亜紀と第三紀の石灰岩からなり，第三紀の時代に南北からの強い横圧力によって形成され始め，隆起運動は現在も続いていると考えられ

ている。これはさほど高い山ではなく，最大標高はイラン領内のビナルード山の 3416 m で，トルクメニスタン側ではおおむね 2000 m 前後である。イラン側は灰褐色の「山岳砂漠」の様相を呈し，乾燥していて植生が極めて乏しい（空からの観察）。これに対し，トルクメニスタン側はかなりの植生が見られところもあり，首都アシガバード付近では濃い緑に被われ一部に残雪も見られるが（3 月下旬の観察），西部ではやはりむき出しの山肌を見せ植生は皆無に近い（9 月下旬の観察）。コペトダーグ山脈には，天山やパミールのような氷河の分布はない。

カザフスタンの首都アルマトゥイ（旧称アルマアタ）は，国土の南東の縁に近い天山山脈の北麓に位置し（海抜 847 m），ここから雪をいただいた嶺々の連なりが美しく望まれる。カザフスタンの広大な国土は，西へ次第に高度を減じ，カザフ高地，ツラン低地を経て，マイナス海抜高度のカスピ海北東岸で終わる。カザフ高地は国土の東約 4 分の 1 を占める標高 400 m 程度の緩やかな高地で，ここには天山山脈の中国領部分から流れてくるイリ川が作るバルハシ湖，アルタイ山脈に源をもち中国のジュンガル盆地北部から流れてくるイルティシュ川が作るザイサン湖（イルティシュ川は西シベリア低地でオビ川に合流する）など大きな淡水湖があるが，高地全体としては乾燥していて植生に乏しく，地表に岩石が露出している場所が多い。ソ連邦時代に核実験場があったセミパラチンスクは，ザイサン湖からやや下ったイルティシュ川中流域にある。国土中部の北側はカザフ・ステップと呼ばれる地味の肥えた草原地帯で，ロシアとの国境近くでは農業が行われている。ツラン低地は標高 100 m 以下の乾燥地帯で，大部分が砂漠であり，塩湖が点在する。それら塩湖の中で最大のものがアラル海で，ここへはシルダリア川（カザフスタン）とアムダリア川（ウズベキスタン）という水量豊かな 2 本の川が流れ込んでいたのであるが，途中での過剰灌漑により水はアラル海に届かなくなり，湖岸から沖へ向かって干上がり白い塩の原となっている。ジョン・コール著「世界の主要地域の地理」（1996）によれば，1960 年と 1991 年の状況とを比較して，湖面の海抜高度は 53 m から 37 m に下がり，面積は 6.7 万 km^2 から 3.1 万 km^2（半分以下）に，また水量は 1090 km^3 から 270 km^3（4 分の 1）にそれぞれ減少した。こ

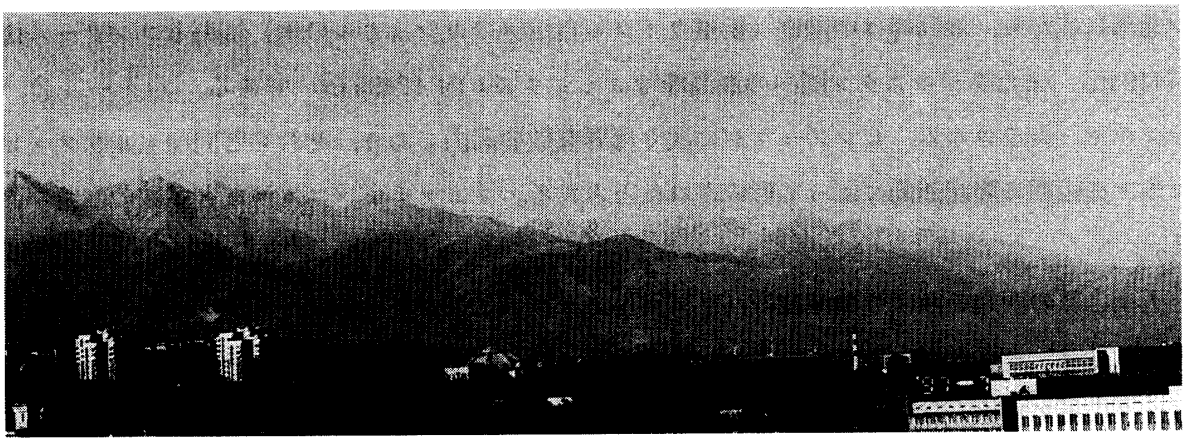

写真 5　アルマトゥイから天山山脈を望む（1997 年 7 月，矢口良一氏撮影）

のことは，アラル海の漁民の生活を破壊し，また大規模な環境破壊であるとして国際的議論を呼んでいる。カザフスタンを流れる大きな川は，上述のイルティシュ川（オビ川の支流），シルダリア川（天山山脈のキルギスタン領を源とする中央アジア最大の川）のほかに，カスピ海北部に流れ込むウラル川がある。

キルギスタンは，国土全体が天山山脈の中にある山国である。天山のこの地域には冬季大量の降雪があり，夏季に溶けて激しく流れ下り，深く切れ込んだ峡谷を形成している。上述のシルダリア川の源流はキルギスタンにある。この国でナリン川（北側）及びカラ川（南側）と呼ばれる2本の川がフェルガナ盆地で合流してウズベキスタンでシルダリア川となる。また，国土東部には周囲の山地から流下する水を受けてイシク湖があり，ここからチュー川が流れ出るが，この川は砂漠地帯に姿を消す。首都ビシュケク（旧称フルンゼ）は，天山山脈（ここではキルギス山地と呼ばれる）北麓のチュー川南側にあり，標高は約800 mである。

タジキスタンは，東部をパミール，西部を天山山脈西縁が占めるやはり山国である。パミール及びその南のヒンズークシ山脈の万年雪や氷河を源とするアムダリヤ川は，タジキスタン及びアフガニスタンの両側のいくつもの支流を合し，両国の国境をなして流れ下る。首都ドゥシャンベ（旧称スタリナバード）は，アムダリア川支流のドゥシャンビンカ川に沿う高原にあり，標高は約820 mである。

ウズベキスタンは，東部は天山山脈の西端部の山岳，中部は砂漠（キジルクム砂漠），西部はウスチユルト台地と名付けられた低い台地，北西部にアラル海，そして南縁沿いに大河アムダリア川という具合に様々な地形要素を有し，景観は変化に富む。また，キルギスタンから流れてきたナリン川とカラ川が急に流れを緩めて合流しシルダリア川となるのが，肥沃な平野の広がるフェ

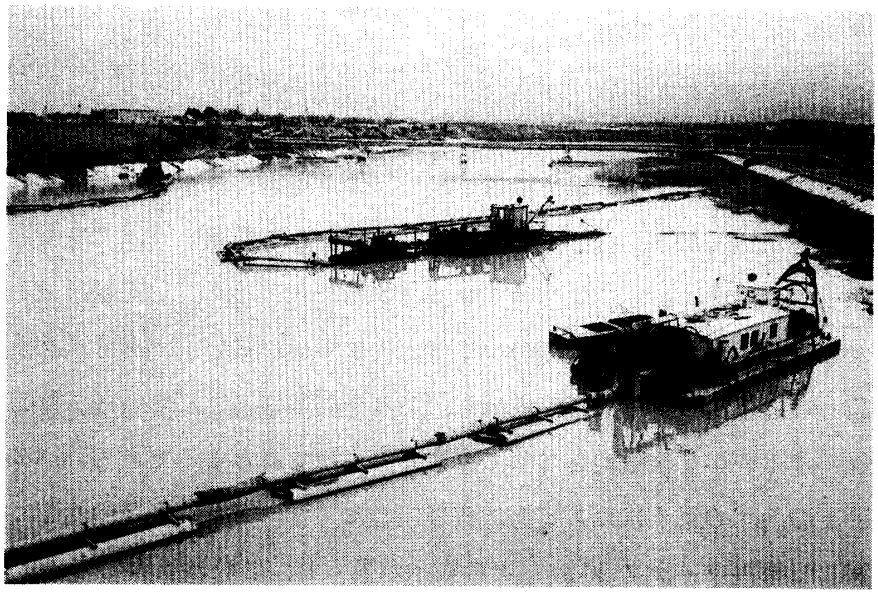

写真6　アシガバート付近における「カラクム運河」（1995年3月，筆者撮影）

ルガナ盆地である。首都タシケントは，天山山脈の山麓にあり，標高は 428 m である。

トルクメニスタンは，国土の大部分が砂漠（カラクム砂漠）で，南はコペトダーグ山脈で境され，西はカスピ海に面する。アムダリア川の豊富な水を分水し，人工湖に貯めて水位を上げ，これをカラクム砂漠に流して灌漑しようとしたのが「カラクム運河プロジェクト」である。この運河は 1954 年に着工し，カスピ海に近いネビトダーグの町までの 1100 km が完成している。首都アシガバートは，市街の北を運河が東西に走り，南に山脈が連なる埃っぽい町で，標高は 228 m である。

5. ザカフカス地域の自然景観

ここでは，上述のようにカフカス（コーカサス）山脈本体を「大カフカス山脈」，ザカフカスの南側の山地を「小カフカス山脈」と呼ぶことにする。

大カフカス山脈は，黒海北東岸からカスピ海西岸にかけて幅 180 km，長さ 1200 km にわたって伸びる大山脈である。アルプス・ヒマラヤ造山期の隆起運動によって形成されたもので，主として中生代ジュラ紀及び白亜紀の堆積岩からなり，一部に火山を伴う。山脈西部に標高 5000 m 以上の嶺が連なり，最大標高はエルブルーズ山西嶺（安山岩の溶岩）の 5633 m で，これはロシア連邦カバルジノ・バルカル共和国にある。多数の小氷河が分布し，エルブルーズ山付近のアドミルス氷河が代表的なものである。山脈北面は主に草原であり，南面側には森林が多い。

小カフカス山脈は，アゼルバイジャン，グルジア，アルメニア，トルコ北東部，イラン北西部にまたがる高い山地で，地形は一定の方向性を示さない。地質は，主として新生代の火山岩からなるが，一部に深成岩や中生代の堆積岩を含み，全体として複雑な様相を呈する。最大標高はグルジア国境に近いトルコ領内にあるアララト山（火山）の 5123 m である。旧約聖書において「ノアの方舟」が流れ着いたとされるこの山は，イスタンブールからテヘランへの飛行機の左窓から，万年雪を被った姿としてはっきりと捕らえることができる。

グルジアの黒海側は平野で豊かな農業地帯をなし，砂浜海岸にスミフなど保養地がある。内陸に入るにしたがい乾燥地となる。首都トビリシは，小カフカス山脈の万年雪を源としてカスピ海に流れるクラ川上流の河畔にあり，標高は 490 m である。

アゼルバイジャンは，ザカフカス 3 国の中では比較的平地の多い国である。クラ川中流に大規模なダムを建設して，下流の沖積平野を灌漑し，これを農業地帯としている。首都バクー付近は，大カフカス山脈がゆるやかな丘陵地をなしてカスピ海に没するところである。バクーの市街地は，その丘陵地がバラのトゲのようにカスピ海に突き出したアプシェロン半島の南側に広がっている。バクーの市街図には標高マイナス 20 m などの表示が見られ，これは世界でもっとも低いところにある首都であることを示す。市街地を離れると植生の乏しさが目立ち，殆ど利用価値のなさそ

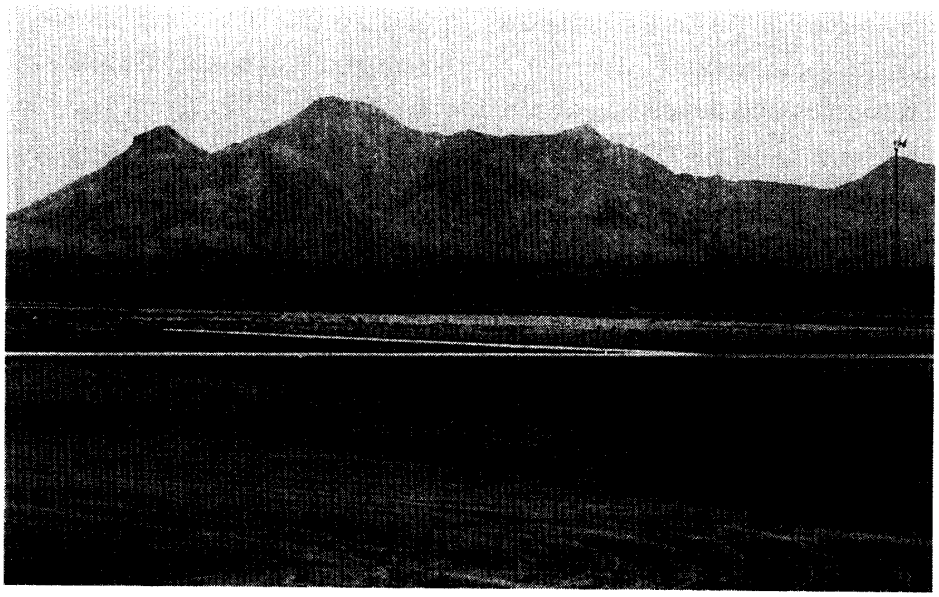

写真7　バクー南部の禿げ山（1997年9月，筆者撮影）

うな禿げ山が続いている。

アルメニアは，小カフカス山脈の中の大部分が標高1000 m以上の山国であり，乾燥した殺風景な山岳景観が特徴である。中央部にあるセバン湖から南へ流れ出るラズダン川とそれが合流するアラス川の谷あいが比較的水に恵まれ，主要な生活の場となっている。首都エレバンは，ラズダン川の河畔にあり，標高は990 mである。　（つづく）

Natural Landscapes and Petroleum Resources in Central Asia and the Trans-Caucasus Area (Part1)

Takashi SAITO

Abstract

The area summed up here as "Central Asia and the Trans-Caucasus Area" spreads over the central and western parts of Asia; the western margin of China to the east, the eastern coast of the Black Sea to the west, the southern margin of Central and West Siberia and the Volga-Ural district to the north, and borders with Pakistan, Afghanistan, Iran and Turkey to the south. This area was annexed to the Czarist Russia in the 19th century and was controlled by the strong power of Moscow of the Soviet Union as member republics for several tens of years. Taking the opportunity of collapse of the Soviet Union in 1991, most of those republics obtained the independence.

Characteristic natural landscapes are steep high mountains, deserts, big rivers and lakes.

Petroleum resources in this area, especially in and around the Caspian Sea, have been attracting the strong interest of American, European and Asian oil enterprises. (Matters on petroleum resources and development are discussed in Part 2 in the next issue.)

参考文献

論文・記事

大藤茂・加藤丈典・上野貴司・川井奈緒美・平井喜郎，天山山脈 中部独山子—クーチャ ハイウェイ沿いの地質概要，「地学雑誌」，107巻1号，p. 104-118，写真12葉（1998）

田中浩一郎，旧ソ連諸国との物流拡大を狙うイラン，「中東経済」，vol. 25, no. 3, p. 28-41（1998）

単行本・事典・年鑑類

「グランド現代百科事典」，学研（1972）

"Academic American Encyclopedia": Arete Publishing Co., Ltd.（1980）

「万有百科事典⑩世界地理」，小学館（1975, 1982）

「世界大百科事典」，平凡社（1988）

"The New Encyclopedia Britanica (15th edition)": Encyclopedia Britanica Inc.（1974, 1990）

「国際情報大事典」，学研（1993）

Graham Bateman & Victoria Egan (ed.), "The Encyclopedia of World Geography": Round House（1993）

松田壽男，「砂漠の文化中央アジアの東西交渉」，岩波書店（1994）

"Turkmenistan: On Its Own Way":（アシガバートで配布されているパンフレット）（1994）

John Cole, "Geography of the World's Major Regions": Routledge（1996）

メンヒェン・ヘルフェン（著），田中克彦（訳），「トゥバ紀行」，岩波文庫（1996）

「地球の歩き方・46・ロシア ウクライナ コーカサスと中央アジアの国々 '97—'98」，ダイヤモンド・ビック社（1997）

Z. ブレジンスキー（著），山岡洋一（訳），「ブレジンスキーの 世界はこう動く 21世紀の地政戦略ゲーム」，日本経済新聞社（1998）

"International Petroleum Encyclopedia"（各年）

「imidas」（各年），集英社

「知恵蔵」（各年），朝日新聞社

テレビ番組（放映順）

「シルクロードの謎大苑国発掘～甦る古代中央アジア～」，NHK総合テレビ（1994. 2）

「シルクロード鉄道紀行～民族の夢を乗せ11000 km～」，NHK総合テレビ（1997. 8）

「シルクロード探検史～知られざる大谷探検隊～」，TBSテレビ（1997. 11）

「シルクロード オアシスの国々は今」，NHK教育テレビ（1997. 11）

「灼熱のシルクロード ユーラシア大陸横断列車の旅」，TBSテレビ（1998. 1）

「大英博物館⑤流砂に消えた秘宝～中央アジア・文明の十字路～」（NHKスペシャル），NHK総合テレビ（1988），NHK教育テレビ（1998. 2再放送）

「コーカサスの虜」（カザフスタン・ロシア映画），NHK教育テレビ（1998. 2）

「イヌワシは放たれた～キルギスタン・草原に生きる鷲匠たち～」，NHK総合テレビ（1998. 2再放送）

（4月27日受付，5月16日受理）